

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童理解と個に応じた指導」

受講生氏名：渡邊 楓華

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私がこのテーマを設定した理由は、児童一人一人を理解した上で、個に応じた指導をしていきたいからである。私は、児童が安心して学校に行くことができるような環境を作っていきたいと考えている。そのため、児童のことを理解していかなければならない。児童のことを理解するように関わっていけば、信頼関係が生まれ、児童も安心して学校に行くことができる。児童理解をし、児童一人一人をしっかりと見て授業をすることで個に応じた指導ができ、授業の質が高まると考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 児童とのコミュニケーションをすることでの児童理解
- イ 授業内での子どもへの学習サポート
- ウ 教師の児童に対しての指導方法

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

演習前期では、第3学年に入らせて頂き、演習後期では、そのまま持ち上がりで第4学年に入らせて頂いた。最初の方から積極的に児童に話しかけ、距離を縮め、児童理解していた。どのように話しかけると信頼関係が生まれるのかを考えながら接するようにした。そのようにして学級の児童を知り、児童を理解した上で担任の先生を見ることで個に応じた指導に着目し、研究に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア 児童理解について

児童を理解するためには、まず自分から声をかけていくことの大事さが分かった。話しかけることで児童も私自身のことを知りたいと思えるようになり関係を築いていくことができ、跳び箱が苦手な児童に対して、指導をした。指導をして、その児童は跳び箱を跳ぶことができた。挑んだ児童は、喜び、私のことを信用してくれるようになった。教師として信頼されるためには、そのように適切な指導で児童の可能性を伸ばしていくことが大事であることが分かった。

イ 個に応じた指導について

児童理解を深めていくことで、支援が必要な場面を見分けられることが分かった。しかし、支援をするだけではなく、支援を控えてその児童が1人で頑張るように見守ることもあった。個に応じた指導は、支援だけではなく、その児童にとって頑張らせたいところでは敢えて何もせず見守ることも必要であることを学んだ。また、一斉授業の際に授業についていけない児童がいたら、その児童を発表させていた。学級の友達と一緒にまなばせるような指導もあることを学んだ。そのように児童一人一人を見て、児童の理解を深めることで授業の時にその児童に目を向けてあげられることができるということが分かった。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、様々な先生方に講義して頂いた。また養成講座生同士で、意見交流する機会を頂いたため、より深い学びにつながる事が出来た。特に印象に残っている講義は、第13回の「ICTを活用した授業実践」である。昨今の教育現場には様々な特性を持つ児童がいる。そのような子どもたちに合わせて、教育していく必要がある。ICTは、そのような多様な児童に有効な手段となる。より柔軟に今後、必要とされる能力として、問題解決能力や的確な予想、革新性などの力が求められている。そのため、GIGA端末を積極的に活用し、リテラシーを高めていくことが大切であることがわかった。著作権などにも気をつけながら授業に使っていききたい。また、学習問題を効果的に、提示したり、他者と話し合い学びを深めるために使ったりし、児童の学びを広げることが大切だと感じた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童との関わり方

児童との関わり方について学ぶことができた。友達のような関わりをするのではなく、その児童の気持ちに合わせつつ、程よい距離感で接することの大事さが身についた。また、児童と関わる際は、自分の話をしていくことで、児童からも心を開いてくれるようになることがわかった。児童の個性を知ることで、授業も大きく変えられる。児童を深く知るには、授業の基盤を作っていく上でも大切であるため、意識して関係づくりをすることが大切だと感じた。

(2) 授業力

成長したこととしては、授業である。まだまだ不足な点はあるが、前の時間の授業の改善点を考えながらすることで、だんだんとより良い授業を展開していったと思う。最初は、時間配分がうまくできず、授業の中心に焦点を当てられなかった。しかし、授業の中心に時間を割くことを決めて行うことを最後にはできたことが成長したことだと考える。まだまだ、課題点はあるが、この養成講座を通して授業力は、大きく成長できたことだと思う。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私が様々な児童と関わり、児童を成長させていくことで、児童自身が将来幸福な人生を作り出せるような人になって欲しいと強く思う。私が教職を歩んでいく中で、児童たちの将来に影響を受けることを考え、教師という自覚を常に持っていく。また、私自身も共に児童たちと成長して、授業力だけではなく児童からも学んでいきたい。私は児童たちが小学校生活を楽しみ、学び、成長できるような環境を作っていきたい。

(2) 今後の課題

児童が成長するためには、授業力を磨いていかなければならない。授業力をつけるために、今後も教職員の方から学び、学級の児童たちの実態に合った授業を作っていきたい。実践的な授業力をつけるために、まず児童のぼそつと言った発言も聞き逃さないような力をつけていきたい。このつぶやきを聞くことができると授業がより良いものになるからである。また、児童たちを理解することも大事である。児童を理解し、信頼関係を築くために、児童が何を考え行動するのかについてこれからも学んでいきたい。また、支援が必要な児童に対して、同じような支援をするのではなく、その児童にあった支援を考え、実行できるような児童に寄り添うことのできるような教員になりたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童理解と個に応じた指導」

受講生氏名：平岡 桜夏

1 演習テーマ設定理由および研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

小学生は学校にいるほとんどの時間を学級で過ごす。児童にとって学級が一つの社会であり学び育っていく大切な場所である。そのため教員は児童にとって安心して安全な学級にする必要がある。そこで児童にとって居心地の良い学級にするためには教員と児童一人ひとりとの信頼関係が必要不可欠であると考え、そこで教員は児童とどのようにコミュニケーションを図り信頼関係を獲得し、学級経営につなげているのか学びたいと考え、私は「児童一人ひとりとの信頼関係」をテーマにした。

(2) 研究方法

- ア 授業中における教員と児童の関わり方や声掛けの仕方
- イ 授業外での児童との関わり方
- ウ 児童とのコミュニケーションの図り方や児童理解の仕方
- エ 年度の変わり目の教員の学級運営の仕方

2 演習テーマに関わる実践内容及び学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習前期では2年生、後期では3年生と4ヶ月の間同じ学年で実習を行った。そこで授業中だけでなく休み時間や給食、掃除の時間など1日の全ての時間を児童と一緒に過ごした。その中で児童を観察し、積極的にコミュニケーションを図り児童理解に努めた。また学級担任の年度の変わり目での学級経営の行い方や授業の行い方や教材教具の工夫、児童の発言を授業にどのように取り入れていくのか、など様々なことについて学ぶことができ、自分の授業や児童との接し方に取り入れるよう実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア 学級経営について

児童との信頼関係を構築するためには学級経営の要である4月の学級開きが大切になってくる。私が入らせていただいた学級では、担任が児童を指導するときのボーダーラインや基準を示すことや、クラスでのルール作り、一人一役などを決めるところから取り組んでいた。このように児童との信頼関係を構築するためにまず行うことを整理し、集団としての大切さを児童と共に確認し、またコミュニケーションを図りながら学級経営をスタートさせることが大切であることが学べた。

イ 授業での児童との接し方について

授業が充実し、児童にとって意味のある授業になるためには児童の意見をうまく吸い上げ授業に取り入れていくことが一番大切だと考える。しかし教師と児童との間に信頼関係がないと児童が持っている良い意見や考えを口に出さない。そこで児童が進んで発表できるよう発問を工夫したい。また児童が発表する際は他の児童の手を止めさせて、発表する児童の方を向くといったルールや拍手をするなどのルールを決め、互いに学び合い認め合う雰囲気を作ることが大切であると感じた。また机間指導の際に一人ひとりの児童に声をかけ、褒めることによって児童の自己肯定感も向上し積極的に授業に参加してくれると学べた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では京都府の教育施策や児童に身につけさせる能力について学ぶことができた。多様な子ども達がいる一つの教室の中で紙だけで授業を行うのは児童にとって知、徳、体を一体的に育むことは難しい。そこで ICT の活用を行いロイロノートや、動画撮影など日常的に ICT を活用し、子ども達にとって ICT を一つの文房具にすることが大切だと学べた。

次に各教科の授業の行い方や学級経営について教員の方々から学ぶことができた。教科によって教え方や授業の進め方は違うが授業は子どもたちの意見がないと成り立たない。児童の意見を授業に取り入れることが大切である。また教科横断的に授業を行うことも大切であることがわかった。そして児童とのコミュニケーションを図り、一人ひとりしっかり観察しながら学級経営を行うことで児童も発言しやすくなるため学級経営は最も大切であると学べた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業での教材研究

私は教育実践演習で数回授業を行った。児童にとってわかりやすく、かつ児童が主体的な取り組みになるよう教材研究に努めた。そして何回も授業の回数を重ねていくことで児童にあうよう教材の工夫を行った。そうすることで児童から「わかった!」という意見が多く見られるようになった。担当の教員からも子ども達に意見を出させてそれを取り入れるのが上手くなっていると言ってもらえ成長が実感できた。授業を行う上で児童に意見を出させ、その意見を授業に取り入れていくことが大切だと学べた。

(2) 学級内での児童とのコミュニケーション

私は同じ学級で子ども達に積極的に関わり、長い時間を過ごすことで児童理解をし、関係を深めていった。このように自分の強みを活かし児童とたくさんコミュニケーションをこれからも取っていくことで児童にとって居心地の良い学級づくりに励んでいきたい。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

「夢・未来」講座で多くの教員の方々から話を聞き、教員は本当に大変で未来のある子ども達の大切な6年間で預かる大切な仕事だと感じた。そして小学校の現場で児童とコミュニケーションをとり関わる中で、本当にやりがいのある仕事だと感じた。そのことから児童にとって安心して安全な学級経営ができるよう、そして学ぶことの素晴らしさを理解させられるよう、児童一人ひとりとの信頼関係が築ける教員になりたいと決意した。

(2) 今後の課題

課題として授業力が挙げられる。児童の意見を聞き入れ授業に取り入れることはできるようになったが、他の教員の授業を見ている中でまだまだ自分自身の授業と他の教員の授業にはすごく大きな差があり、児童の理解度の差があると思う。また授業は、1日に6時間行わなければならない。そのことからこれからは多くの教員の授業を参観し、話を聞きながら良いところを自分のものにできるよう、そして自分の理想の授業が作れるようになりたい。

**第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「児童の多様性を認める力を育むための学級づくり」**

受講生氏名：中園 みお

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

現代の日本ではグローバル化が進み、より一層「共に生きる社会」の実現が求められている。この「共に生きる社会」である共生社会を実現するために、これから生きる子どもたちが「多様性を認め合う力」を身に付けることが必要になると考える。学校が「多様性を認め合う力」を児童に身に付けさせることで、将来共生社会に貢献する児童を育むことができると思う。そこで、小学校でのどのような学級づくりをすることで児童に相互の受け入れ、認め合う力を育むことができるのか疑問に思いこのテーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 学級担任の先生が児童にどのような指導や関り方をしているのかを観察する
- イ 学年会などの参加や、学級担任への聞き取り
- ウ 普段の学校生活の中での児童の人間関係や児童の行動を観察する

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

私が今回の演習で実践をした一つにクラス全体を巻き込んだ授業づくりがある。多様性を認め合える学級づくりのために、授業内でお互いの意見を受け入れるということが重要であると思う。体験授業をさせていただいた低学年の場合、指導者が中心となって授業での意見を広げ、友達が意見を言ったときにはどのような反応をすればよいのかを理解させることで、発表した児童も自分の意見を受け入れてくれる安心感が生まれることを実感した。

(2) 演習校で学んだこと

ア 担任の指導について

4月に2年生のとあるクラスで国語のテスト返しがあった。そのテストを返す前に学級担任が児童に自分のテストの点数との向き合い方について指導をされていた。その内容が「点数に良い悪いはない。もし間違いがあれば、その間違いの分、賢くなれる。」という指導であった。これは児童に自分のテストの点数を受け入れ、失敗は悪いものではないという、自分の点数とどのように向き合うとよいのかという指導であった。このような指導をすることで、失敗は悪くないという児童の考え方が生まれ、学級全体がお互いの失敗を認め合えるようになるのではないかと考える。このような授業の中での一つ一つの指導が学級づくりであることに気づき、児童にとって学級を心の居場所にする大切な要素の一つであることを学んだ。

イ 学級経営について

私が1年生のクラスに入らせてもらったときに、学級担任が授業中に友達の見解に対して、全員が反応することを大事にしており、非常に雰囲気の良い授業であった。多様性を認めるとは障害をもつ人、外国の人だけではなく、異なる考えをもつ人を受け入れるということでもあると思うので、このような授業づくりは児童が多様性を認め合う力を育てるための重要なものであると実感した。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座を通して学んだことは、授業づくりの工夫についてである。大学では学ぶことができないような授業づくりの工夫を現役の小学校の教員などから教わることができ、「夢・未来」講座は私にとって、とても貴重な時間となった。

その中でも特に印象的だったのは「小学校における外国語教育」で学んだ、能動的な児童を育むことについてである。能動的な児童を育むことにより、授業にクラス全員が積極的に参加できるような授業ができる。対話を大切にしたい授業づくりのために児童同士の対話を鍛えるという取り組みについても学んだ。特に私が学んだ中で大切だと思ったことは教師が児童を褒めてあげることである。能動的な児童を育むために、教師が児童の意見を認め、褒めるということは児童にとって、安心できる教室にもなる。児童の発言に対して返す言葉が大事であり、自分自身が教師になった際に意識していきたいと思えるようになった。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

いかに児童にその授業に興味を持ってもらうかは導入で決まるということを「夢・未来」講座で学び、導入が大切であるということに気付いた。そこで、私は演習で実際に授業を行う際に導入に特に力を入れた。「どのようにしたら児童に興味をもってもらえるか」を考え、写真やパワーポイント等を用いて、児童がその授業に対して「面白そう」と思える導入づくりを心掛けた。

導入はその授業が児童に興味をもってもらうきっかけになる。さらに、その授業の雰囲気をつくるものでもあるのだと実践演習を通して気づくことができた。実際に、国語の漢字の授業で漢字クイズを導入で取り入れてみた。その際に児童はクイズに楽しそうに参加しており、授業の雰囲気がとても良いことを実感した。そして、自分自身も児童が楽しそうにクイズをする姿をみて安心し、楽しく授業ができた。このように、導入は授業に興味をもってもらうだけではなく、授業の雰囲気づくりにもなるのだと学んだ。

(2) 児童理解

演習校にて指導教員の先生から児童理解について学ぶ機会があった。その際に「褒め方」と「叱り方」について学んだ。この学びを活かし実践することができたのは「褒め方」についてである。日頃から児童の努力や態度、小さなできごとを褒めるということは児童と教師の良い関係づくりに繋がるのだと気づき、また実践してみて実感することができた。児童とすれ違った時などに一声かけて褒めるだけでも児童にとってはとても嬉しいことで、自信にも繋がると考える。教師になってからもこの褒めることを大切にして、児童との良い関係を築いていきたい。

5 教師に向けた決意と今後の課題

(1) 教師に向けた決意

私は将来、児童にとって楽しい授業をしていきたい。そのためには、まず教師が児童を理解し、そのクラスに合った授業づくりが必要である。また、研究授業など授業改善に力を入れ、自分自身の授業力を磨き続けていく教師になりたい。

(2) 今後の課題

私の一番の課題は児童との関わり方にある。実際に授業中に落ち着きがない児童の対応に困った時があった。適切な対応をするために、日頃からのコミュニケーションや保護者との連携を大切に、児童理解をしていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「学級経営における教師の役割」**

受講生氏名：宇古 和矢

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、3回生の9月の教育実習で児童への生活指導での伝え方に悩み、実習期間内でどのように伝えることが効果的なのかについて私自身の考えを持つことができなかった。児童が意欲的に学習に取り組んだり、お互いに注意し合ったりすることは学級経営と深く関わっていると考える。教師力養成講座を受講するにあたり、指導について私自身の考えを持ち、児童と多くの時間を共にする学級を経営していく教師の役割を学びたいと思い、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 担任と児童との関わり方の観察
- イ 児童同士の関わり方の観察
- ウ 担任への聞き取り

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は5年生、後期は6年生の学級で演習を行った。その中で、授業や休み時間で担任の先生方はどのように児童と関わられているかを観察した。また、児童間の関わり方の観察や、私が児童と関わる中で気になったことを聞き取り、担任の先生方の大切にされていることを学んだ。観察や聞き取りを通して、「自分ならどのように声をかけるか」といった自分なりの視点を持ったうえで児童と関わり、演習に取り組んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア 児童と共に取り組む

教師と児童が同じ目標を持ったうえで学級会や行事に取り組むことの大切さを学ぶことができた。児童に任せる場面と一緒に取り組む場面を使い分けることで、児童は責任感や楽しさを感じながら取り組んでいた。学級会では、議題が提示されると主体的に児童が司会、書記を担当し、時間内に何を話し合うのかを考え、進行していた。また、担任の先生方と取り組んでいる時の児童の様子は普段より明るく元気なものであった。演習させていただいた学級は高学年であったが、全て児童に委ねるのではなく、教師も一緒になって取り組むことで、児童が安心して生活することができる学級づくりに繋がることを学んだ。

イ 児童を評価する

後期に演習させていただいた学級では、「付箋プロジェクト」が行われており、児童が頑張っている様子や、良いところを付箋に書いて渡すことでその場で児童を評価されていた。その場で評価することで、評価された児童は他のことにも一生懸命取り組み、周りの児童も頑張るといった相乗効果が生まれていた。児童がすぐに取り組むことができるものを、学級のプロジェクトとして取り組むことで、楽しみながら同じ目標に向かい協力して取り組んでいたと考える。教師から指導されて行動するのではなく、ゲーム的要素も取り入れて楽しみながらできることを増やしていく方法もあることを学んだ。児童を評価するためには、児童が何をしているかを日々見取ることが必要であると感じた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、講義を聞き、グループ協議をすることによって、1つのテーマに対し様々なものの見方・考え方があることを知った。より視野を広げることが必要だと感じた。教師として求められている力は何かといったことや、今取り組めることは何かといったことを多くの講義で学ぶことができたが、特に印象に残っているのは、第4回の児童理解と学級経営についての講義である。児童にとって学級は助け合うことができる1つのチームであり、学級経営の充実を図ることが児童理解に繋がることを学んだ。グループワークでは、「どのような学級にしたいか」を話し合った。人それぞれに学級経営で大切にしたい軸があることに気づいた。その中でも、児童の背景を知ることや、軸をぶらさないことが共通していたため、正解の対応はないが、児童のことを考えて軸のぶれない学級経営をしていく必要があると感じた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童との関わり方

演習では、積極的に話しかけ、児童と関わっていくことを意識した。話しかけることを繰り返すことで、児童の変化に気づくことができた。児童によって、教師にどのように関わってほしいかという望みは違うが、話す時はその児童を笑顔にしようと意識して関わった。演習初日と最終日を比較して、前半は自分から話しかけることが多かったが、後半は児童から話しかけてくれる場面が増え、短い期間の中で児童との距離を縮めることができた。児童と関わる中で変化に気づく力を身に付けることができた。

(2) 児童を評価する

教師力養成講座を受講する前に、教員養成サポートセミナーを受講しており、その際、テスト前に勉強している児童のどこを褒めてあげると良いのか悩んでいた。しかし、4ヶ月の演習を通して、児童の様子を継続的に観察する中で、どのように児童が成長しているのかを知ることができた。児童を褒める際は、これまでとの比較が大切であると感じ、その小さな変化に気づくことが必要であると感じた。褒めることで、児童が自信をもって積極的に物事に取り組もうとする姿を見て、褒めることの大切を学んだ。児童の褒め方を自分なりにつかんで実践できたので、今後はさらに磨いていきたい。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、4ヶ月間継続して児童と関わることはできたが、これからも児童と関わり続けていきたいと強く思った。春休み期間など教職の忙しい部分を経験できたことも良い学びとなった。また、児童の成長に触れることができ、教職の魅力を改めて感じることはできた。教師力養成講座での出会いや学びを忘れず、児童が安心し、学校に来たいと思える学級経営ができる教師を目指したい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、授業力の向上である。授業をさせていただいた学級は、担任の先生方がこれまでに積み上げてこられたものがあったため、児童に支えられて授業が成り立ったのと感じた。これから授業づくりを行っていく際には、時間配分を意識し、児童から授業の問いを引き出すことのできる授業を目指したい。また、私自身の武器が声であることを教えていただいたので、その武器を活かして一回で児童全員が理解できる指示を出せるように、簡潔にわかりやすい言葉で伝えることを意識したい。授業で児童が意欲的に取り組むには、学級経営が密接に関係していると感じたので、授業力の向上だけでなく、学級経営にも重点を置き、どちらも共に伸ばしていくことができるよう学び続けていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の将来を見据えた学級経営」

受講生氏名：福井 健人

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 研究テーマ設定理由

小学校では、担任が1年間を通して子どもと関わる時間が長く、長期的な視点で児童をどのように成長させていくべきかということを考えられる。担任の日頃の指導や声かけについての意図を知り、自分が担任となった時に発達段階や児童の成長した姿を意識した学級経営を行いたいと考えている。教師力養成講座では、年度末と年度始めの貴重な期間を経験することができる。そのため、担任としての締めくくりの仕方や新しい学級でどのような思いをもって学級経営を行っているのかを学びたいと思い、この研究テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 担任から児童への日常的な指導と声かけについての観察
- イ 児童の学級担任への思いの変化や目指す子どもの姿についての聴き取り
- ウ 学年に応じた学級経営への意識と考察

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期では4年生、後期では5年生で演習を行い、中学年と高学年で担任による学級経営を観察した。特に4年生の担任からはこれまでの児童の様子を聞き、高学年としての目指している姿について聞き取りも行った。5年生での演習でも、学年開きに参加して学年全体として取り組む目標を確認して演習に取り組んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア 周りを見て行動することを意識させる

中学年と高学年では「周りを見て行動すること」を大切に指導していきたいと感じた。児童も日頃の担任の先生からの指導を受けて教師からの指示を待つのではなく、状況を見ながら児童同士で注意をし合って行動しているのが印象的だった。児童の登下校での姿や学級での姿を例にして取り上げて、その姿を見た地域の方や低学年がどう思うかを考えさせることで自分の行動が与える影響について深く考えるように指導を行った。そのため、状況を見て何を求められているのかを考えたり、友だちの表情やしぐさから気持ちを読み取ったりして自分の行動や周りの注意などを一人一人が考えながら誰もが嫌な思いをしないような雰囲気が作られていると感じた。

イ 授業で雰囲気を作る

生活面での指導だけでなく、授業で雰囲気を作ることも意識したいと考えている。授業での展開を工夫し、児童が意見を交流しやすくする必要があると感じた。時間を設定した分かりやすい指示を出したり、「できた」ことに対しては褒めることを意識したりすることで、児童が考えて行動することを促していく。

様々な学級を見させてもらい、担任が与える学級への影響は大きいと感じた。だからこそ、1日の大半を占める授業時間の雰囲気を大切にしていく。主体的に学ぶためにも、児童の意見に耳を傾け、「解けるかもしれない」「やってみたい」という思いを引き出して意欲的に学びに向かえるようにしたい。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教師として知っておくべきことや学級経営や授業で意識すべきことなど幅広く学ぶことができた。特に第8回の「特別の教科 道徳」についての講座は印象に残っている。講座を受けるまでは、多様な意見を引き出すことや教師からの教え込みにならないようにすることが困難だと感じていた。しかし、講座で初対面の人でも意見を伝えやすい雰囲気を作り、多様な考えが引き出される授業を見て、私もこんな授業を行いたいと感じた。導入での発問による「言いやすい雰囲気作り」や、教師が児童に寄り添って「心を見ようとする工夫」などは、他教科でも大切にすべきだと思った。授業でも児童の声に耳を傾け、児童と教師が共に考え、共に探す姿勢を大事にするとともに児童の気づきをもとに内容を深められるような授業を目指していく。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業実践力

授業をすることで45分間という時間の中で児童が何を学んだか明確にできるように、ねらいに沿った展開を意識できるようになった。多くの先生方や演習生にも授業を見てもらうことで、単元でのゴールの姿をイメージできるような導入や展開の工夫、児童の実態に合わせた指導など自分では気づかなかった視点でのアドバイスを頂いた。今後の授業で実践したいという思いも生まれた。他にも児童に大切なことを伝える時の声に抑揚をつけたり、学ぶ楽しさを引き出す展開を工夫したりするなど、改善すべき点に気付くこともできた。これらの気づきから、私自身の力を伸ばすために授業改善に取り組み続けていきたい。

(2) コミュニケーション力

教師力養成講座が始まった時と比べると、児童や先生方と積極的にコミュニケーションをとれるようになったと感じる。児童とは授業中は全体を見渡し、困っている児童に気づき話しかけることを心掛け、休み時間には児童の輪の中に入って遊ぶことで信頼関係を築くことを意識した。先生方とは、目指す子ども像やこれまでの成長について情報を共有することで児童への理解を深めながら指導することができた。授業や指導のことで悩んでいることも周りの人に相談することで、解決することもあった。今後も学級担任だからと一人で悩まずに、教員間での報告、連絡、相談を行うことで児童との信頼関係について学んでいく。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

児童と関わる中で「分かりやすかった」「できた」と喜ぶ姿や、担任から1年間で児童が成長した姿を聞いて教師としてのやりがいや魅力を感じ、より一層、教師になりたいという思いが高まった。加えて、授業や子どもとの関わりで未熟だと思う点にも気づくこともできた。その点を少しでも改善できるように、これからも学校現場での人とのつながりや指導法について学び続けていきたい。

(2) 今後の課題

授業実践力については学んだことは多かったが、今後の課題もたくさん見つかったと感じている。特に「学ぶ楽しさを感じられる授業」を目指していきたい。教科書の内容をどのように伝えるかによって児童の「分かった」という楽しさの実感は大きく変化してくると思う。引き付ける導入や児童の声や気づきを拾って進めていく授業展開など、学習意欲を高められるような工夫を行う。学級の雰囲気づくりやICTの効果的な活用、抑揚をつけて話すことなど授業に影響することは数多く考えられる。それら一つ一つに気を付け、児童の「わかる」喜びを積み重ねて、主体的に学びに向かえるような授業にしていきたい。

**第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「児童が主体的に学習するための授業づくり」**

受講生氏名：福原 向葵

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習で実際に授業を行ってみて、指導書や参考書を見ながらただそれに従って授業をするだけでは、児童が主体的に学び考える力は育まれにくいと感じた。目の前の児童に目を向け、児童理解を行い、興味や関心の高まる授業づくりを行うことが、児童が主体的に学習することにつながると考える。演習を通して、学級や児童の事態に即した、児童が主体的に学習するための授業づくりが、実際どのように行われているのか知り、今後どのように授業を作っていけばよいのか研究したいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 先生方の授業で行われている主体性を引き出すための工夫を学び、それに対する児童の反応の観察をする。
- イ 児童が主体的に学習するための工夫を考え、授業実践する。
- ウ 実践内容の振り返りと考察

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習テーマに関わる活動としては、授業観察と児童の様子や反応の観察、授業実践を主に行った。授業観察では、担任の言葉がけや発問、授業内での取組を学んだ。また、放課後には担任の先生から、授業の内容や取り組ませた活動の目的や意図について話を聞くようにした。

児童の様子や反応については、児童がどのようなことに興味や関心を示すのかに注目しながら観察した。担任の発問や指示の言葉がけの仕方の違いによる反応の変化や、どのような授業の取組であれば、積極的に参加するのかなどを注意してみるようにした。観察を通して学んだ内容を踏まえて、授業を実践するようにした。

(2) 演習校で学んだこと

ア 児童理解に基づいた授業づくり

主体的に学習するための授業をつくるには、児童理解が重要であると学んだ。担任は、児童が興味や関心のあることと授業内容を関連付けるようにしたり、グループワークやタブレットの使用などその学級の児童が得意とする学習活動を積極的に取り入れたりしていた。担当学級は ICT を使用する力に長け、グループでの話し合い活動も積極的に行う児童が多くいたため、担任が与えたテーマに基づいてタブレットを使用しながら班ごとに調べて発表するというような学習を行っていた。児童らは自分たちで課題を設定し、それぞれが分かりやすいと思う方法で調べた内容をまとめるなどして、主体的に学習に取り組む姿がみられた。これらの授業の様子から、児童理解で得た情報を授業に活かすことが、学習意欲の向上につながり、その結果主体的に学習できる授業になると学んだ。

イ 授業中の言葉がけや発問

授業中の担任の発言や発問の仕方も重要であると学んだ。担当学級の担任は、あえて間違えた発言をすることで児童に考えさせるきっかけを与えたり、厳選した発問で児童の思考をサポートしたりするなど、児童が「知りたい、考えたい、話し合いたい」と思えるような発言や発問をしていた。これを実践するには、事前に授業の流れに伴って、児童がどのように思考し、どのような反応や発言をするのかを十分に考えておく必要があり、事前の準備が重要であると教えていただいた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では ICT 教育や、人権教育、学習評価、令和の日本型教育等の様々な分野について学ぶだけでなく、京都府の教育についても学び理解を深めることができた。「夢・未来」講座の中で特に印象に残っているのは、新しい時代の教育の在り方等についての講座である。現在の京都府の教育の現状は、基礎・基本が定着している一方で学ぶ楽しさ、学ぶ意義を実感できていない児童生徒が一定数いることが課題である。この課題を知った時、将来教師を目指す者としてこの課題に向き合わなければならないと感じた。この課題を解決するためには「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりが必要である。個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、一人一人の意欲を高める学びや授業の提供と児童生徒の協働した学び合いや多様な他者と協働した学びを実現し、学ぶ意義を感じさせ学び続ける力を身に付けさせることが大切であると学んだ。

「夢・未来」講座で様々な分野について学んだが、どれも教師に必要な知識や能力である。

教師は様々な分野についての知識や能力が求められる職であるからこそ、学び続け成長し続ける姿勢が大切であると学ぶことができた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

4 か月間の教師力養成講座を受講して、これまで以上に学校現場への理解を深め、教師になるための力を身に付けることができたと感じている。演習では、多くの児童や先生と関わりながら日々の活動を共にを行い、授業をするという経験ができた。この経験を通して、授業をする際の視野の広がりや臨機応変さなどの、授業力における成長を感じている。何度も授業をすることで、徐々に心に余裕が生まれ、児童の様子を見ながらそれに合わせた授業の進め方ができるようになった。教師からの一方的な授業ではなく、児童と共に思考し、お互いがコミュニケーションを図りながら、自分たちで問題解決を図ろうとする双方向型の授業を行うことで、児童がより主体的に学ぶようになると気付くことができた。

他にも、児童に寄り添う力を身に付けることができたと感じている。演習中は児童への理解を深めるために、児童の様子を観察したり、学習のサポートを積極的に行ったりするようにした。児童が困っている際には、課題について共に考えることで、児童の成長を身近に感じることができた。また、褒めるなどの肯定的な言葉がけも積極的に行うようにし、児童が学習に対して否定的にならないように気をつけた。この活動を通して、児童一人ひとりに寄り添うことが相互的な信頼関係の構築に繋がっていくのだと気付くことができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教職についての理解をさらに深めることができた。演習では、多くの児童と関わりながら、様々な場面で児童の成長を見ることができた。これらの経験を経て、これまで以上に教師になる意思が強くなった。

将来、児童一人一人が安心して学校に来ることができる学級を作り、児童が楽しみながら主体的に学習できる授業が行える教師になりたい。そのためにも特に「気付く力」と「伸ばす力」を養い、児童一人ひとりに寄り添える力を身に付けなければならない。教師になって目指す教育を実践するという強い意志をもって、より良い教育が行えるように今後も学び続ける姿勢を大切にしていきたい。

(2) 今後の課題

今回の教師力養成講座を通して授業力の成長を感じたが、反対に多くの課題にも気付くことができた。特に一番の課題だと感じることは、授業に波をつくることである。授業中の話し方にあまり抑揚が無く、単調になりがちなのが課題であると感じている。話し方が単調であることで、児童の集中や授業への興味や関心が、時間が進むにつれて薄まっていることに気が付いた。児童が注目するような話し方や問の取り方、授業内の活動の工夫を考え、今後改善できるようにしたい。

**第 16 期 「教師力養成講座」を終えて
「児童理解を深めるための、学年に応じた関わり」**

受講生氏名：馬淵 莉奈

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

小学校の特徴の一つとして、学年ごとの発達段階の違いが大きいという点がある。そのため、どの学年の児童に対しても同じように対応するのではなく、それぞれの学年に応じた関わりが大切だと考える。また、児童理解を深めるためにも、発達段階や学年ごとの特徴を知ることが大切であると考え。実際の教育現場で、それぞれの学年によって、先生方がどのように児童と関わり、授業や学級経営をされているのかを学び、児童理解に繋がりたいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 異なる学年の担任による児童への指導や児童との関わり方を観察する。
- イ 異なる学年の担任による授業づくりや学級経営の違いを観察する。
- ウ 多くの児童と関わり、それぞれの児童との良い関わり方を探る。

2 演習テーマに関わる実践演習内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践演習内容

前期は2年生、後期は5年生の学級に入らせていただき、異なる学年の授業や学級活動を観察した。その中で、担任の先生は授業や学級経営で、どのような工夫をされているのかを考えながら演習に取り組んだ。また、担任の先生としっかりコミュニケーションを取り、児童への指導において大切にされていることを聞くことができた。

児童との関わりでは、担当学級の児童の名前を早く覚え、声をかけたり、登下校時や休み時間に他学年の児童とも関わったりと、とにかくたくさんの児童と積極的に関わる中で、児童のことを理解し、それぞれに応じた関わりができるよう意識した。

(2) 演習校で学んだこと

2年生の授業では、児童の考えから展開が進められていたり、低学年だからこそ国語では物語の登場人物になりきる活動があったりと、児童の理解が深まる授業になっていた。日頃から授業でも学級活動でも、児童が自分たちの考えを発表したり、自分たちで物事を進めたりする場が多く作られていて、低学年にも関わらず、常に自分たちで考え、進めていくことに慣れていることに驚いた。日頃の授業や学級経営の大切さ、そして担任の力の重要性がわかった。また、担任の先生は、児童を特別扱いしないことを大切にしているとおっしゃっていた。児童は自分が特別扱いされていると感じたら余計に嫌になる場合もある。例えば、すぐに集中が切れたり、暴れたりしてしまう児童に対して、その子に焦点を当てるのではなく、周りの児童と同じように注意をしたり、先に別の児童に支援に行ってからその児童の支援をしたりと、児童自身に気付かせることを大切にしておられ、大きな学びとなった。

5年生の授業では、算数の授業で出てきた答えを全て取り上げ、児童が意見を言い合い、正しい答えを導き出しているのが印象的だった。間違った答えも取り上げることは、日頃の指導がしっかりできていないと難しいと思うので、学級経営が様々な活動に繋がっていると感じた。また、担任の先生は児童のいろいろな発言や、休み時間の揉め事などに対して、きっちり丁寧に指導していた。日頃から小さいことでも見逃さない、細やかな指導が大切だと学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、多くの先生方の講義を受け、教育に関するあらゆる分野の内容を学ぶことができた。様々な講義を受け、授業をする際も、道德教育や人権教育などをする際も、日頃の学級づくりやクラスの雰囲気繋がってくることを知り、学級経営の大切さを学んだ。「夢・未来」講座の中で特に印象に残っているのは、「授業実践講座」である。実際に講師の先生の授業や講義を受け、児童の言葉を大切にし、児童の言葉を繋げて授業をつくることの重要性を学んだ。

また、「夢・未来」講座を通して、養成講座生と交流し、自分にはない視点に出会えたり、考えが深まったりした。そして、交流する中で、同じ教師を志す仲間として高め合うことができた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

私が教師力養成講座で身に付けた力や成長したことは主に二つある。

一つ目は、授業力である。私は教師力養成講座の演習で、初めて小学生に対して授業をした。授業の進め方や発問の仕方など課題はあったが、実際に児童の前に立って授業をしたことは私にとって大きな経験になった。また、先生方の授業を見学し、児童の発言や考えを大切にしたい授業や、児童の主体性を引き出す授業を見ることができ、今後の授業づくりに活かしていこうと思った。

二つ目は、気付き力である。学級に入り、児童の支援をする中で、困っている児童に気付き、段々と児童それぞれの支援の仕方や関わり方がわかるようになった。また、私が授業を行った際、ある児童がぼそっと言ったことを拾ったり、支援が必要な児童に素早く机間指導をしたりすることができた。広い視野で児童の変化に気付き、誰一人取り残さない授業や学級経営を行っていきたい。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教師に向けた決意

教師力養成講座を通して、先生方の授業づくりや学級経営において大切なことを学ぶことができ、自分が教師になった際に実践したいと強く思った。そしてなにより、演習校で児童と関わる中で、素直で可愛い姿や楽しそうに活動する姿をたくさん見ることができ、教員になりたいという気持ちが強くなった。

また、「夢・未来」オープン講座での教育長の講話を聴き、教師としての「幸せ」の素晴らしさを再確認できた。なぜ教師になりたいのか、どんな教師になりたいのかをしっかりと自分の中で持っておき、教師という仕事に「幸せ」を感じられる教師になりたい。

(2) 今後の課題

私の今後の課題は二つあると考える。

一つ目は、その場の児童の考えに沿って、児童の言葉から授業を展開することである。私が授業をした際、児童の予想外の発言に対して戸惑ってしまったり、うまく児童の言葉を繋げて授業を展開することができなかつたりした。今後は、児童の言葉を大切にし、児童の言葉を繋げて授業が展開できるように力を付けていきたい。

二つ目は、指導力である。5年生に体育の授業をした際、騒がしくなってしまう、説明や指示がすぐに通らなかった。活動的になると、騒がしくなってしまうので、話を聞かせる場面では、しっかり指導し、活動についての説明に加え、活動が終わった後どうするかという、次の姿まで示すと良いということを学んだ。教師として「聞かせる技術」を身に付け、児童に合った細かい丁寧な指導ができるようにしたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童理解に基づいた学級経営」

受講生氏名：辻本 帆花

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、教員養成サポートセミナーで教員の考えや思いがどのような学級経営につながるのかについての研究を行っていた。その研究を通して、教員の児童への具体的な未来像が学級経営に深く関係していることを知ったと同時に、教員の独りよがりな学級経営にならないためには、「子どもたちの思い」を中心とした児童理解が必要不可欠であることを学んだ。この学びを、より具体的に自身の実践に生かしていけるような力に変えていくために、演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 担当学級での個別の関わり合いと全体の関わりを意識した授業観察
- イ 授業者としての児童理解をふまえた授業実践
- ウ 学級での一人一人の児童との関わり
- エ 先生方と考えを共有する機会

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 授業中に児童を「見る」ということについて

授業を行った中で、児童全体を見ることができていないことが分かった。児童一人一人に個別の指導を行うことももちろん大切だが、授業の中で児童全員を把握することの大切さに改めて気づかされた。具体的には、見ることにに関して大きく2つのことについて学んだ。まず1つ目は、それぞれの児童には活動の差があることに気づいた。授業中に落ちていて児童を見ることを意識すると指示に気づいていなかったり、板書することに必死で授業内容を理解できず授業から離脱してしまっていたりしていることに気づくことができるようになってきた。そこから、全員が一度で理解できるような短い指示や発問や、聞かせることを意識した指示や発問をすることの難しさを身にしみて感じた。2つ目は、指示と評価の一体化である。指示をしてそのまま活動に入ることが多々あったが、指示したことに対して児童を評価すると、学習規律にも良い影響があることを学んだ。指示を出して終わりではなく、児童をよく見て、素早く動いている児童を取り上げて、全体の中で評価をすることで、ほかの児童の意欲も高まり、全員の意識をそろえることができることを学んだ。

(2) 児童のできることを生かして伸ばす

児童の中には得意不得意が明確に分かれている児童もいる。担当学年にうまく話すことができない児童がいた。私だったら、児童の負担や心労、ほかの児童の影響なども考え「聞いているだけでいいよ」と言ってしまうと考えていた。しかし、担任の先生は、その児童ができる範囲で自分の思いを表現させることを指導しておられた。その児童はロイロノートやメモ機能、ジェスチャーを使って、ほかの児童とコミュニケーションを取っていた。その後、担任の先生とこの出来事についてお話しする機会があった際に「児童を見守るだけではなく、できることを生かして伸ばしていく指導を心掛けている」ということを教えてもらい、私自身非常に感銘を受けた。私も児童の可能性を信じ、できないことを見るのではなく、できることを伸ばしていく指導を意識していきたい。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育や外国語、道徳、などの教科指導、学級経営などの幅広い分野からたくさんの先生方に学ばせてもらった。その中で、印象に残っていることは、「学習指導要領に対応した学習評価」の講座である。指導と評価を一体として取り組むことで、児童の活躍できる場を増やし、「何のために学ぶのか」を子どもたちと理解していくことが重要であると学んだ。また、その際に実践例も併せて知ることによって、自分の中でどこか他人事として捉えていた指導要領を、自分の経験や演習での出来事と結び付けながら、捉えなおすことができた。中でも一番心に響いたのは、「子どもたちは分かってくれる、背負い込まずに頑張り続ける」という言葉である。授業は決して教員一人で作るものではなく、子どもたちと一緒にやっていくものである、と気づくことができた。一人で背負いこみ、不安になって授業するのではなく、子どもたちを信じ、自分を信じることで、授業の捉え方が大きく変わった。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) つながる力

演習校では、積極的に児童と関わることを意識して取り組んできた。改めて一人一人の児童と向き合い、関係を築いていく難しさを実感した。また、給食や休み時間などの授業外での交流や、授業内での児童との関わりなどから、信頼関係を築けているなど感じることも多々あり、教師としてのやりがいを感じることもできた。また、授業づくりや児童の対応で困ったことの相談、日々の学校生活を過ごす時間を通して、先生方ともつながりが生まれた。実際に働いてみてのアドバイスや、学生の時間にすべきことなど、幅広く教えていただいたことは、これからの教員生活に生かしていきたいと考えている。

(2) 受け入れていく力

演習校での自分自身の成長もちろん貴重であるが、養成講座生同士の学び合いの中で生まれるお互いの成長も強く感じた。今まで所属大学内での交流のみしか経験していなかった私にとって、それぞれ違う場所で学んできた講座生同士の関わりから新たな視点に気づかされることが多くあった。自分が当たり前だと思っていたものが、実は問題点を孕んでいたりと、今まで見たことがない授業の構成であったりと、新たな発見が毎日あり、刺激された期間であった。また、「夢・未来」講座で取り入れられていたグループ協議やペア活動で、さまざまな学校の演習生と意見を交流することで、新しい視点が生まれ、それを自分の中で受け入れていく時間になったと感じている。教員になっても、ほかの学校の先生や同僚と関わる機会は必ずある。その際に教師力養成講座でのつながりも大切にしながら、新たな考えを受け入れ、自身の成長につなげていく。

5 教職に向けた決意と今後の課題

短い期間だったが、教師力養成講座を通して濃い経験をし、教員になりたいという思いがより一層強くなった。実際の教育現場に行き、自分から関わり、学んでいく中で、日々変化していく子どもたちにどう対応していけばいいのか、全員が理解して参加できる授業をするにはどうすればいいのかなど、壁にぶつかってしまうこともあった。しかし、何よりもやりがいを多く感じた4か月だった。子どもたちが変わっていく瞬間を間近で見届けたいという強い想いを胸に、常に子どものことを考え、行動していく教員になりたい。

また、今後の課題として、自らの指導の中にメリハリをつけることを意識して子どもたちと接していきたい。教員としての自覚をさらに持ち、「先生らしい振る舞い」を意識して、これからも取り組んでいきたい。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて

「児童が意欲的に学習に取り組むための授業の工夫」

受講生氏名：村山 果奈

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、児童が勉強を楽しめるような授業をする教師になりたいと考えている。そのためには、児童が自発的にもっと知りたい、学びたいと思えるような授業の工夫を行う必要がある。そのような児童の好奇心をくすぐる授業とは、どのような授業なのかについて現場で研究したいと思い、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア 担当の先生の授業を観察する中で、実践されている指導の工夫を見つけ、学ぶ。

イ 学んだ指導の工夫を自らの授業実践で取り入れる。また、自分なりに工夫を考え実践する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では 4 年生、後期の演習では 6 年生の学級で演習をさせていただいた。担当の先生の授業を観察する中で、どのような場面でどのような声かけを行っているかということや、どのように授業構成が組まれていて、そこにはどんな工夫があるのかということに注目した。放課後などに、その声かけや授業展開の工夫についての意図などを先生に教えていただき、学びを深めた。また、授業実践を行う時には、子どもが意欲的に考えたいような発問や活動内容を考え、実践を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア 導入で児童の心をつかむ

導入において、本時の学習で達成したい目標である「めあて」が子どもたちの中から自然に出てくるように活動を設定することが大切だと担当の先生に教えていただき、授業実践では、そのような導入を意識して行った。「めあて」を教師から提示する形ではなく、児童自身から引き出すことによって、その後の活動の際に、児童の意欲がとても高まっている姿を見ることができた。また、子ども達自身が何を学ぶ授業なのかについてより焦点を当てて学習することができていた。「もっと知りたい」や、「どういうことなんだろう」といったような児童の考える力をくすぐり、「めあて」を児童から引き出すことができる導入は、その授業内容について児童の心をつかむことにつながっていた。その結果「児童が意欲的に学習に取り組む」ことができることと学んだ。

イ 児童の意欲を引き出す発問の工夫

担当の先生の授業を観察する中で、児童の意欲を引き出すためには、「分かる！」という自己効力感を児童に持たせた上で、もっとその先を知りたい、考えてみたいという気持ちにさせるような発問を行うことが有効であることを学んだ。そのような意欲をもたせるための過程で、児童の対話がたくさん生まれるような発問を行い、児童主体で授業が進んでいくことが重要であると分かった。

ウ 遊びの中に学びを含ませる

授業実践でゲーム要素を取り入れた授業を行ったのだが、児童がとても楽しみながら学びに向かうことができていた。児童が遊びのように楽しんでもできる活動は、自然に意欲的に取り組むことができることが分かった。遊びの活動を通してしっかりと学力つけるためには、教師がどれだけ遊びの中に学びを取り入れる工夫を施せるかが重要になると学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教育の各分野についての課題点、今後求められる教育などについて学んだ。様々な校種の先生方や専門の先生方からの学びと併せて、受講生同士でのグループワーク、質疑応答の時間を通してたくさんの考え方に触れ、自分では気付かなかった視点に気付くことで視野が広がった。

特に印象に残っている講義が二つある。一つ目は、「学習指導要領に対応した学習評価」についてである。評価の変更に応じて授業も変わっていくべきであり、学びの質の向上を図っていかなければならないと学んだ。質を向上させるための方法として、児童が教材に学ぶ意義を見いだせるようにすることを学んだ。今後授業を行う時に、児童が意義を見いだせるような学習となっているか意識したい。

二つ目は、「教員を目指すみなさんへのメッセージ」である。私は、これまで未熟である自分が来年から教壇に立つことに不安を感じていた。しかし、講義の中で「未熟さに気づくことは変えられるきっかけであり、怖がることではない」とおっしゃっており、少し前向きになれた。お話にあった、“小さな感動に目を向ける感覚を持つこと”を忘れず、着実に歩みを進めていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 教員の仕事

4か月という長期間、現場で演習させてもらう中で、授業についてだけでなく、教員同士の関わりや連携されているところなど、教員の仕事の表には見えていない部分や学校の全体像について以前よりも知ることができた。児童が学校に来ない春休み期間も演習させていただき、教室のワックスがけや教科書の準備、机の高さ変えなどの業務も経験させていただいた。

教員の様々な業務があるからこそ、児童は快適に学校生活を送ることができるのだと知った。

(2) 児童との信頼関係が築かれるとき

演習の中で、児童と関われば関わるほど、信頼関係を築くことができるということを実感した。机間指導の時や休み時間に、授業で躓いていた児童に付き添って教えたり、リコーダーの練習を一緒に頑張ったり、一緒に遊んだりなど少しでも関わった児童とはとても距離が縮まった。また 関わる回数や時間が増えれば増えるほど、児童との関係は深まった。学級担任などのように長期間関わる中でしか信頼関係は築くことはできないと思っていたが、この経験を通して自分の見方が変わった。教員になった時、授業以外での何気ない関わりも、児童との距離を縮めるためのチャンスとして大切にしなければならないと強く感じた。

(3) 教員同士の協働性がもたらすもの

演習生同士で情報共有をし合ったり、悩みを話し合い助け合ったりすることで、前を向けたことがたくさんあり、横のつながりの中で得られるものは大きいということを実感した。授業実践をお互いに見合ったり、授業後の事後研究会で意見を出し合ったりした際も、同じ一つの授業でも様々な視点から学ぶことができ、協働性の大切さを身に染みて感じることもできた。教育実習で実習生が自分一人だった時と比べ、同じ立場である演習生同士で切磋琢磨し、それにより演習がよりよいものとなっていたことから、横のつながりの中で頼ったり助け合ったりしながらお互いを高め合うことの大切さについて改めて気付かされた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

授業を行っている時に、教科書や授業メモ、黒板を見ながら話してしまう場面が多かったため、児童にしっかり伝わっているかその都度児童と目を合わせて確認し、児童の反応や様子をしっかりと見ながら授業を行えるよう訓練していきたい。

また、授業プランを考える中で、児童目線で活動を考えたつもりでも、実際に授業をしてみるとまだまだ児童の目線に寄り添えていないことに気付いた。常に、本当に児童目線になっているかということを自らに問いかけて行動していかなければならない。児童と関わる経験を積み重ね、児童の目線に立った教育が行える教員になりたい。

教師力養成講座の経験を通して、教育について、より現場に即して考えることができるようになった。教員になった時には、この経験を活かし現場の即戦力となれるよう努めていきたい。